

第7回 社会保障研究奨励賞授賞論文

第2席2名（五十音順，敬称略）

- 一圓光弥（健康保険組合連合会研究室研究員）
「ナショナル・ミニマム論再考」『国際社会保障研究』No. 8, 昭和47年7月。
- 山崎泰彦（社会保障研究所研究員）
「年金給付水準の国際比較」『季刊社会保障研究』第7巻第3号，昭和46年12月。

選考経過

大内基金委員会は，社会保障研究所後援のもとに，第7回社会保障研究奨励賞として，上記2編の論文の授賞を決定した。ここに，論文審査委員会を代表して，授賞決定に関する選考経過を報告したい。

今回の授賞は，昭和46年8月以降47年7月までの1年間にわたる既発表論文を対象として行われた（本誌第7巻第4号，107ページに発表された授賞要領参照）。そのため，あらかじめ関係者約60名の方に対して優秀なる論文の推薦を依頼し，8月末の締切日までに7名の方々から8編の推薦を受けた。そのうち第1次審査で3編にしぼり，最終的に上記の2編が選定されたのである。審査委員会での検討の結果，今回は第1席に該当するものなく，2編をいずれも第2席にあてることにした。

以下，2編の論文に対する各審査委員の諸意見を汲んで，簡単に審査の要旨をとりまとめることにする。

一圓光弥，「ナショナル・ミニマム論再考」

この論文は，ウェッブ夫妻の諸文献および救貧法王立委員会の「少数派報告」を吟味することによって，社会体制の改善を目指すナショナル・ミニマム概念の長所を確認し，これをベバリッジ原則に含まれている別の所得維持的なナショナル・ミニマム概念よりも優れていることを論じようとするにある。問題の設定は興味があるし，文献の渉猟も一応よくやっていると見られる。しかし，ウェッブにせよ，ベバリッジにせよ，これらについては多くの先行的諸研究があり，その間にあって著者の意見が説得的に展開されたかとなると，審査委員の多くは疑問をいだかざるを得なかった。ベバリッジをその後のイギリスの制度的経過から見て選別主義と結びつけようという理解は無理であるし，ベバリッジとウェッブとの対比について著書のいう意味で貧困観の基本的相異があると見るのも納得しがたい。今日イギリスにおいてベバリッジ原則がやや後退しつつあることはたしかであるが，そこではなお保守派と革新派とはかなり交錯しているし，また普遍主義と選別主義との対立も決して単純に一義的なものでないことを知らなければならない。ナショナル・ミニマムの問題は，現実的にも思想的にもきわめて意義深いものであるから，今後さらに視点を掘りさげて研究されることを期待したい。

山崎泰彦「年金給付水準の国際比較」

この論文は、制度的に異なる国々の年金給付水準について国際比較を試みたものであり、とにかく安易に高低を結論しがちであることを避け、いくつかの比較上の観点を明確にして主要国の水準を算定しようとしたものである。そこでは第1に「年金給付額の対国民所得による比較」を論じており、その際年齢構成を考慮している点はよいが、進んで高齢人口の分布をある程度取入れる工夫をすると一層よいと思われる。第2に「モデル計算上の給付率の比較」が論ぜられており、各国の異なる年金算定方式をモデル的に整理したうえで、給付額の対賃金比率を比較しようとしているのであるが、ただこの場合、著者は主としてエム・ホーリックの表をかかげるにとどまっていて、むしろ第3の「現実に支給されている年金給付額の対賃金比率の比較」について多くのページを割いている。この問題についてわれわれの期待するのはむしろ第2のモデル的もしくは標準化的な比較であり、この点について突っこみがやや弱いため、論文全体がメモランダム的な印象を与える結果になっている。もちろん問題は決して簡単ではなく、標準化といっても一元的には考えられず、たとえば支給開始年齢の相違とか、従前所得の評価の仕方とか、さらに完全抛出の成熟度とか、いくつかのマルチプルな標準に照して優劣が判定されなければならないのであろうが、こういう方向への工夫をもう少し努めるならば、論文としての価値を幾分なりとも高め得るのではないかと思われる。

昭和47年11月

社会保障研究奨励賞論文審査委員会

委員長 山田雄三

追記

この機会に申し添えておきたいが、大内兵衛先生ならびに関係諸団体のご寄付による「社会保障研究奨励賞」の授賞は今回をもって一応終らせていただき、大内基金委員会も解散することになった。長い間ご支援を賜った寄付者ならびに関係者の方々に対しては心からお礼を申し上げる次第である。

なお、審査員の小山進次郎氏は本年9月急逝されたが、今回の審査ではその補充をなさずに下記6名によって行なわれたことをお断りしておく。

山田雄三（社会保障研究所長）、鈴木武雄（武蔵大学教授）、馬場啓之助（一橋大学名誉教授）、福武直（東京大学教授）、高橋武（ILO 東京支局次長）、小山路男（横浜市立大学教授）